

第7回世界女性スポーツ会議 出張報告

1. 第7回世界女性スポーツ会議

国際女性スポーツワーキンググループ（International Working Group on Women and Sport 通称：IWG※）」が開催する4年に1度の国際会議。1994年に第1回女性スポーツ国際会議がイギリスのブライトンで開催され、2006年5月には日本の熊本県で第4回会議が開催された。第7回となる今回の会議はボツワナのハポローネで開催され、世界各国から約1000人が参加し、20日（日）の基調講演では、IPCのパーソンズ会長がスピーチを行なった。スポーツ庁は2017年4月同団体が推進する「ブライトン・プラス・ヘルシンキ2014宣言」に、日本スポーツ振興センター、日本オリンピック委員会、日本障がい者スポーツ協会、日本スポーツ協会と共に署名をした経緯もあり、本会議に出席。日本政府として基調講演を行うのは、今回が初めてとなる。

(1) 日時：2018年5月17日（木）～20日（日）

(2) 場所：於：ボツワナ ハポローネ

(3) 大会のテーマ：

テーマ1「Being Well To Play Well」

テーマ2「LET THEM LEAD: Changing the Leadership Landscape of Sports」

テーマ3「TELL THEIR STORY:

Leveraging Media To Advocate for Women's Sport」

テーマ4「Welcome And Empower All Through Sport」

テーマ5「SPORTS WITHOUT BORDERS: Cross Culture Collaboration」

テーマ6「SAFE SPACE: Protecting Women In Sport」



2. 日本政府としての発信

5月18日午前、鈴木スポーツ庁長官は、基調講演において、女性のリーダーシップというテーマのもとで、国際的な動向を踏まえながら、日本政府の取組及びスポーツ庁の政策を紹介した。まず、国際的な動向として、国際連合がSDGsゴール5に「ジェンダー平等社会の実現」を掲げていることや、IOCやIWGが女性役員増員について具体的な目標値を掲げていることに言及した。続いて、日本政府の取組として、まずグローバルジェンダーギャップレポートを用いて、日本の現状を述べた上で、それに対する取り組みとしてジェンダー平等に関する法律「女性活躍推進法」等を紹介した。最後に、スポーツ庁の政策として、女性アスリート支援、デュアルキャリア支援、NF並びにIFにおける女性役員増員に関する取り組みを、事例を用いて発表した。結びに、これらの取組がSDGsゴール5「ジェンダー平等社会の実現」の推進に寄与すること、そして女性スポーツの発展がスポーツそのものの価値を高めることを説明した。

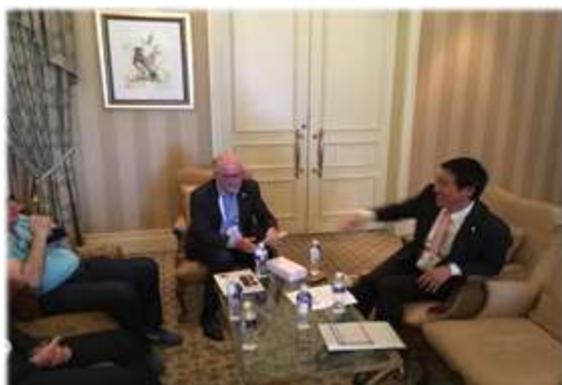


5月18日午前、今泉スポーツ庁国際課長は、パラレルセッションにおいて、スポーツを通じたエンパワーメントというテーマのもとで、プレゼンテーションを行った。まず、国際スポーツ界の女性スポーツに係る動向として、2017年7月にロシアのカザンで開催されたMINEPS VIにて採択されたカザン行動計画を例に出し、その行動計画を実行するものとして、スポーツ審議会スポーツ国際戦略部会で議論を進めるスポーツ国際戦略（案）の構想を説明した。続いて、日本の取組として、2017年10月にミャンマーのネピドーで開催された日ASEANスポーツ大臣会合の成果文書の1つであるコンセプトノートに触れた上で、官民連携プログラム「スポーツ・フォー・トゥモロー」の具体的な活動を紹介し、これらがSDGsゴール5の推進に寄与すると述べた。



3. 国際スポーツ・フォア・オール協議会ボウマン事務局長とのバイ会談

5月18日午前、鈴木長官は基調講演を終え、国際スポーツ・フォア・オール協議会（通称：TAFISA）のボウマン事務局長とバイ会談を行った。ボウマン会長から鈴木長官へ「TAFISA MISSION 2030」が手交され、今後のTAFISAの取組及びソフトレガシーの継承に注力している旨が説明された。鈴木長官は東京オリンピックパラリンピックがこれまでにないレガシーを残す大会となるよう、引き続き支援を行う旨応答した。



4. ボツワナ・女子ソフトボール代表チームの練習視察

本会議によるボツワナ訪問の機会を捉え、5月18日午後、鈴木スポーツ庁長官は、ボツワナ・女子ソフトボール代表チームの練習を、JICA ボランティアの中村さんとともに視察、日本ソフトボール連盟から提供いただいたソフトボール1ダースとグローブ2ケを贈呈した。

日本は、ICA ボランティアの枠組みで、2006年から約2年半にわたって染谷肇（そめや はじめ）さんが、現在は、中村藍子（なかむら あいこ）さんがボツワナソフトボールチームの技術向上に取り組んでいる。これらの取組の成果もあり、ボツワナ・女子ソフトボールチームはアフリカ大陸選手権で優勝し、8月に千葉で行われる世界女子ソフトボール選手権大会に出場を予定、その初戦を日本と戦うことを予定している。



5. タボ・タマネ ボツワナソフトボール連盟会長とのバイ会談

同日、女子ソフトボール代表チームを視察した後、タボ・タマネ ボツワナソフトボール連盟会長とバイ会談を行った。鈴木スポーツ庁長官は、官民連携プログラム「スポーツ・フォー・トゥモロー」や JICA プログラム等により、日ボツワナ間のスポーツ交流が続いていることを歓迎した。タボ・タマネ会長からは、日本から人材面・技術面の支援を受けていることへの感謝とボツワナソフトボールチームへの代表として日本との交流が続くことへの喜びが述べられた。タボ会長が、引き続きボツワナにおけるソフトボールの発展に尽力することをお話され、鈴木長官が8月に千葉で行われる世界女子ソフトボール選手権での対戦を楽しみにしていると応答した。



6. 所感

今回の会議では、アフリカ及び欧州からの参加者が大半で、アジアからの参加者が少ない中、スポーツ政策のトップが出席したことは、我が国の同分野へのコミットメントを国際的に示すとともに、国際的なプレゼンスを発揮する上で非常に効果的であった。

また、長官による基調講演は、日本国政府が行うものとして初めてであるだけでなく、今回の基調講演者の中でも唯一のアジアからの基調講演であり、参加者からも非常に高評価を受けた。さらに、今泉国際課長からSFT事業における国際的な女性スポーツの促進等の取組についてプレゼンテーションを行うとともに、SFTのブースを設けて同事業の広報活動を行ったが、多くの参加者の関心を集め、SFT事業に対する国際的な知名度の高さ及び関心度の高さを感じさせた。

その一方、我が国の女性スポーツに関する取組は、同会議で発表されていた他国・他機関の事例からすると、まだまだ発展途上であり、同会議関係者から学ぶべき点は多いことが確認できた。このため、今後は、本会議の主催者であるIW

Gはもとより、ユネスコ、コモンウェルス及び欧州評議会等の関係機関との連携が必要と考えられる。

また、同会議の課題の1つとして、世界の人口の60%を占めるアジアをいかに巻き込み、アジア地域での女性スポーツに関する取組を普及・浸透させるのかという点がある。この点において、我が国の役割としては、アジアのリーダーとして、同会議での先進事例や成果をアジアの国々に伝え、女性スポーツのアジア地域での普及促進を行うことが考えられ、そのことで、世界全体でのジェンダー平等の達成に貢献できると考えられる。